we support↓
RQ 災害教育センター

MONTHLY
「東北に黒潮を送ろう！大作戦しんぶん」改め
復興支援かわらばん『すけさきた』しんぶん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

OCTOBER 11 2022

# あなたの街の慰霊碑に『名前』は入っていますか？

（2022年1月13日　NHK NEWS WEBより抜粋）

阪神・淡路大震災で亡くなった2人の肉親をしのび、静かに手を合わそうと訪れた兵庫県芦屋市の公園で、兵庫県芦屋市の増田潤さん（71）は、大きな違和感を覚えました。

そこに掲げられていると思っていた母と姉の名前を見つけることができなかったからです。

「芦屋から離れていたので、久しぶりに追悼式に出席しました。ここに2人は休んでいるんだなと、慰霊碑の名前に向かって『やすらかに』と言おうと思ったら銘板がない。なかったんです」

増田さんは、母の悦子さん（当時71）と姉の美紗子さん（当時47）を阪神・淡路大震災で失った遺族です。退職を機におよそ20年ぶりに地元に戻り出席した芦屋市の追悼式での出来事でした。

増田さんが訪れた芦屋市の「阪神・淡路大震災慰霊と復興のモニュメント」は、市役所から歩いて5分ほどの公園にあります。

大きな石のモニュメントは震災の翌年に完成。**その後、犠牲となった市民452人全員の名前を刻印した銘板が、目の前の地中に「奉納」されました。**

**つまり、外から名前は見ることができません。**

**なぜ「奉納」という形を取ったのか。**市役所を訪ねると、担当者が古いメモを取り出して、いきさつを教えてくれました。

震災から10か月後の平成7年11月、地元のロータリークラブから「モニュメントを寄贈したいので、犠牲者の名前を刻印するため名簿を借りたい」という申し出があり、当時の市の幹部たちは、1か月かけて議論を行いました。しかし、**遺族の了承を得るのが難しいことや名前公表の基がないことから、名簿を外に出さないと判断**したそうです。

「遺族と亡くなった人がつながっている1つの絆として名前があるというのは痛烈に感じます。それを、外に出してご自身で確かめたいという意見もあれば、逆に、名前は内に秘めておきたいという人もおられる。**同じ思いだけども真逆の答えが出てしまう**ところをどうするか。当時の職員たちも葛藤したのだと思います」（芦屋市担当者）

そんな増田さんが行き着いたのが隣の神戸市でした。

毎年、震災が起きた1月17日に灯籠を並べ、追悼のつどいが行われる公園、東遊園地にある「慰霊と復興のモニュメント」には、神戸市以外で犠牲になった人たちの名前も掲げることができると聞いたからです。

管理するNPOによると、現在ある五千人を超える人の名前のうち、およそ230人が市外で亡くなった人だということです。『どこで亡くなっても、同じ震災の犠牲者だ』という考えによるものだとのことです。

先月11日、増田さんは母親と姉、2人の名前を刻んだプレートをこの場所に加えることができました。

「名前があるから碑の前で亡くなった人に感謝できるし、謝ったりできると考えています。震災を忘れてはいけないというけれど、防災のためにも名前は必要だと思います。この場所で永遠に『地震は怖い』、『苦しい』、『死んだらあかんぞ』ということを世の中に発信し続けてくれると思います」

阪神・淡路大震災からの復興や防災への提言を続けてきた、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科長の室崎益輝さんは、亡くなった犠牲者一人ひとりの命の重みを想像し、災害の記憶や防災の教訓をつないでいくことが大事だと指摘します。

「阪神・淡路大震災では6400人が一度に亡くなりました。一人ひとりが亡くなった積み重ねがこの数字になっていると認識して、慰霊することが私たちに求められてると思いますが、そのためには名前をしっかり確認することが欠かせません。**遺族の感情を尊重することが大前提としたうえで、まずは希望する人だけからスタートしていく。**その後の時間経過とともに名前を刻んでほしいという人が増えればどんどん名前を増やしていく。そうすれば個人のプライバシーの侵害や遺族の名前を公表したくないという気持ちに反することにはならないだろうと思う」

その上で室崎さんは、こう付け加えました。

「多くの人が亡くなった災害を社会全体で共有していくためには、行政が後押しをする、先頭に立つことが求められると思います。そうして、一人ひとりの名前を刻んだ慰霊碑を残すという責任があるのではないでしょうか」

慰霊碑は何のためにあるのか。名前をそこに掲げる意味は何なのか。答えは1つではないと思います。

**最初に紹介した兵庫県芦屋市は、慰霊碑に名前が入っていないものの、震災20年の式典で犠牲者の名前を読み上げ、亡くなった一人ひとりを追悼し、毎年1月17日には遺族に銘板の写しを公開しています。**

大切なのは、名前を刻みたい・それを望まない、という、**それぞれの思いを尊重**しつつ、より多くの人たちに記憶と教訓をつないでいくことだと思います。（神戸放送局　井出瑞葉）

資料：NHK NEWS WEB（抜粋は文責による）

文責：井上文子（西表島エコツーリズム協会　東北復興支援担当）